学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	永井 明子
2. 審査委員	主査：連大特任教授（鳴門教育大学） 山崎 勝之 副主査：連大教授（鳴門教育大学） 川上 綾子 委員：連大教授（兵庫教育大学） 市井 雅哉 委員：連大教授（上越教育大学） 越 良子 委員：連大教授（鳴門教育大学） 田村 隆宏
3. 論文題目	児童期における関係性攻撃が健康・適応と仲間関係に及ぼす影響 —関係性攻撃への教育的介入の可能性を考慮して—
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 永井明子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和5年2月6日（月） 14時00分～14時45分 場 所：オンラインにて実施</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下に示す、3部、全13章から構成されている。</p> <p>第Ⅰ部 児童期における攻撃性の諸相</p> <p>第1章 攻撃性研究の動向</p> <p>第2章 児童の攻撃性と適応および健康</p> <p>第3章 児童の攻撃性と社会的情報処理</p> <p>第4章 本論文における研究の目的</p> <p>第Ⅱ部 小学生の反応的および道具的攻撃性に関する研究—道具的関係性攻撃を中心に—</p> <p>第5章 小学生用P-R攻撃性質問紙（PRAQ-C）の作成【研究1】</p> <p>第6章 小学生用P-R攻撃性質問紙を用いた分類基準ならびに性差と年齢差【研究2】</p> <p>第7章 小学生の攻撃性と健康【研究3】</p> <p>第8章 小学生の攻撃性と日常ストレス【研究4】</p> <p>第9章 小学生の攻撃性と社会的情報処理【研究5】</p> <p>第10章 小学生の道具的関係性攻撃と仲間関係【研究6】</p>

第Ⅲ部 小学生の攻撃性への介入の可能性と今後の研究課題

第11章 今後の研究課題

第12章 児童期における道具的關係性攻撃適正化への介入の可能性

第13章 要約ならびに結論

概要は以下の通りである。

攻撃性を、フラストレーション等でもたらされる怒り感情を伴う反応的攻撃と目的を達成するための道具として攻撃行動を使う道具的攻撃に大別するという考え方 (Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987) に従い、さらに反応的攻撃を反応的表出性攻撃と反応的不表出性攻撃に細分化し、道具的攻撃を道具的關係性攻撃で代表させるという分類方法 (坂井・山崎, 2004a; 山崎, 2002a) を取り入れ、児童 (小学校4～6年生) の攻撃性の特徴、中でも道具的關係性攻撃の特徴を明らかにすることを目的とした。なお、反応的表出性攻撃とは、言葉や身体などを使って直接的に表出される攻撃、反応的不表出攻撃とは、敵意など直接的に表出されない攻撃、道具的關係性攻撃は、他人の人間関係を操作する攻撃である。反応的攻撃は怒り感情が伴い、道具的攻撃は伴わない場合もある。

研究1 (坂井・山崎, 2004a) では、上記の分類方法に従い、反応的攻撃 (反応的表出性攻撃および反応的不表出性攻撃) と道具的關係性攻撃を測定することができる、十分な信頼性と妥当性を兼ね備えた質問紙、児童用 P(Proactive)-R(Reactive) 攻撃性質問紙 (PRAQ-C) を完成させた。信頼性は、内的整合性と再検査安定性により、妥当性は担任教師によるノミネート法により検証された。この質問紙を使用し、研究2 (坂井・山崎, 2003a) では3,500人を越える児童を対象に、攻撃性の基礎的データを集めた。得点の分布、分類基準、学年差と性差、および各攻撃性間の相関状況について詳しい資料が提供され、ある児童の得点が全体のどのあたりに位置するのかを大まかに示す基準として利用可能となった。

研究3 (坂井・山崎, 2003b) および研究4 (永井・山崎, 2017) では、児童の適応・健康状態を検討した。児童の適応問題は外在化問題と内在化問題に分類されるが、研究3では内在化問題に焦点をあて、抑うつ傾向および学校適応 (学校生活享受感情) と攻撃性の関係を明らかにした。道具的關係性攻撃からの影響に関しては、男女で異なる結果が得られ、共分散構造分析を用いた統計分析の結果、女兒の場合は道具的關係性攻撃の高さが抑うつ傾向を低め、男児の場合は道具的關係性攻撃の高さが学校生活享受感情を低めることが示され、関係性攻撃から内在化問題への影響については、性差ならびに内在化問題の違いによる差違が確認された。

研究4 (永井・山崎, 2017) では、抑うつ傾向に至る前の日常ストレスと攻撃性 (反応的表出性攻撃、反応的不表出性攻撃、道具的關係性攻撃) との関連および攻撃性からストレス反応への因果関係を検討することを目的とした。その結果、全攻撃性について、攻撃性が高いほど、ストレス反応も強くなっていた。ここで、3攻撃性間の重なりを排除するため、反応的表出性攻撃のみ、反応的不表出性攻撃のみ、道具的關係性攻撃のみが高い群およびすべての攻撃性が低い群のストレス反応を比較したところ、高道具的關係性攻撃児はすべてのストレス反応下位尺度 (身体的反応、抑うつ不安、不機嫌怒り、無気力) において低攻撃児と比較してもストレス反応が高くなるとは言えなかった。道具的關係性攻撃と各ストレス反応下位尺度との間には中程度以上の相関が見られていたにも関わらず、である。しかし、4つの下位尺度の合計ストレス反応得点は低攻撃児に比べて高く

なっていた。研究3では男女で抑うつや学校生活享受感情への悪影響が異なったが、抑うつの前段階と言えるストレス反応全体では男女とも道具的關係性攻撃が高いほどストレス反応が高くなっていることが明らかになった。

研究5（坂井・山崎，2004b）では、3種類の攻撃性の高い児童の認知の特徴について調べた。具体的には攻撃性の社会的情報処理6段階のうち、道具的攻撃の高い児童に歪みが出やすいとされている後半部分に焦点を当て、第5段階の「反応評価」および「結果予期」について調べた。第5段階での認知の歪みを引き出しやすいとされている明確な挑発（加害者の意図が故意である場合）を含む葛藤場面に対する反応として、3種類の攻撃性それぞれに対応した、反動的表出性攻撃反応、反動的不表出性攻撃反応、道具的關係性攻撃反応の3種類の反応パターンを用意した。その結果、道具的關係性のみが高い児童は、表出性攻撃反応、不表出性攻撃反応、關係性攻撃反応のいずれについても、低攻撃児に比べて、それぞれの攻撃反応を肯定する傾向が強かった。これは、道具的關係性攻撃のみを強く示す児童の特徴であるが、男児女児それぞれについて、攻撃性の高さが彼らの社会的情報処理の第5段階にどの程度影響しているかを共分散構造分析で調べたところ、道具的關係性攻撃の高さは、種類に関わらず攻撃反応を肯定するような認知を高めており、なかでも關係性攻撃反応は道具的關係性攻撃の高さから正の影響を大きく受けていた。

これにより、高道具的關係性攻撃児は、關係性攻撃反応はもちろん、不表出性攻撃反応や特に表出性攻撃反応を示すことを容認（承認）しており、様々な高攻撃児との仲間集団形成の可能性を示し、このような集団は学級の中で様々なトラブルを引き起こす可能性が考えられた。

研究3、研究4および研究5の結果の背景には児童の仲間関係が関与していることが考えられ、研究6（永井，印刷中）では児童の仲間関係と攻撃性の関連について調査し、高道具的關係性攻撃児の仲間関係の質（学級内で最も仲の良い友だち：Best Friendとの相互の自己開示と相手理解の程度）と量（自己開示と相手理解をしている／されている人数）の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果、仲間関係の質と量については、道具的關係性攻撃のみが高い児童だけが低攻撃児よりBest Friendから自己開示を受けている程度を高く認識し、自分に対して自己開示しているクラスメートの人数も、相互に自己開示しているクラスメートの人数も多いと認識していた。さらに、性毎の分析では、高道具的關係性攻撃男児のみが低攻撃男児と比べ、自分を理解しているクラスメートの人数、お互いに理解しているクラスメートの人数、自分に対して自己開示しているクラスメートの人数、お互いに自己開示しあっているクラスメートの人数も多いと認識していた。このように、道具的關係性攻撃のみが高い児童で一貫してみられた自分からの相手理解・自己開示と相手からの相手理解・自己開示との齟齬は彼らの友人関係におけるアンバランスさを示していた。

上記の研究を受け、第11章では、今後の研究課題として、児童期以降の道具的關係性攻撃児の健康や適応、仲間関係質問紙の妥当性の検討、社会的情報処理モデルの他の段階（第3、4段階）における高道具的關係性攻撃児の特徴、また媒介要因としての仲間関係についても質問紙以外の方法でBest Friendの精度の高い同定などの諸課題が指摘された。そして、第12章においては、道具的關係性攻撃を適正化する介入プログラムの在り方について論議した。そこでは、これまでの關係性攻撃の適正化にかかわる海外でのプログラムを紹介しながらその不備を指摘し、新たなプログラムの開発の必要性が強調された。そして、本研究結果から示唆されるプログラム内容について考察し、關係性攻撃の概念と問題性の気づきの学習、攻撃にいたる情報の処理・認知の特

徴とその変容方法，さらに，実際に関係性攻撃の実行とは拮抗する行動として主張的行動，向社会的行動，共感性を学習するプログラムの開発内容を示唆した。こうして，本論文の最後には，本研究結果を実践的な介入へとつなげる方向が紹介され，得られた知見の実際の適用が学校における社会貢献の観点から論じられた。

2. 審査経過

本論文の審査と評価の概要は，以下のとおりであった。

本論文では，最初に，これまでの攻撃研究を概観し，その概念を発展させるかたちで攻撃性の細分化を試み，道具的関係性攻撃，反応的表出性攻撃，反応的不表出攻撃に弁別するという新たな視点を導入した。そこから，その測定方法の開発を行い，信頼性を内的整合性と再検査，妥当性を教師指名と仲間評定という多面的な観点から確認し，完成度の高い測定法を開発できたことは評価された。その後，病前状態としての抑うつや日常ストレスを対象に関係性攻撃を中心とした各攻撃性と適応との関係を明らかにし，病前状態に鋭敏になる研究姿勢が確認された。そして，実際に3つの攻撃性をもつ問題を，社会的情報処理過程と友人関係という観点から調べる研究に入った。そこでは，道具的関係性攻撃の情報処理過程の歪みに注目し，その第5段階の歪みをビニエット法という児童に適した測定法を採用し，理解度を高めた上で測定して結果を出した点は注目された。さらに，仲間関係では，対人関係の質のみならず量をも考慮し，質と量の両面から各攻撃性の特徴を導出できた。そして最後は，この研究知見から考えられる学校における攻撃性適正化への介入プログラムの在り方をユニバーサル予防プログラムの観点から示唆することができた点も評価された。

なかでも，攻撃性というネガティブ特性の細分化に関する未知の研究に果敢に挑戦し，しかも各研究は極めて大人数の参加者を対象に行われ，その意味で安定した結果を導く可能性が予見された。また，研究の出発点といえる測定法は，信頼性が高く，従来の多くの尺度で欠落している妥当性を周到に確認した点は特記される。この尺度は現在，日本の多くの研究者が使用するほどの出来映えになっている。また，攻撃性の問題について，問題の発生源としての社会的情報処理過程に注目し，きわめて精度の高いデータ採取が行われた点は高く評価された。さらに，統計分析は，各攻撃性の独立性を考慮した分散分析から，特性を定量的に扱った共分散構造分析まで必要に応じて適切に使い分けている点が評価されたことも追記される。そして，これらの知見を基礎研究知見として孤立させず，学校でのユニバーサル予防プログラムの開発に貢献するかたちで利用できる方向が示されたことも社会貢献という点では価値がある。

今後の発展としては，①道具的関係性攻撃と反応的不表出性攻撃の概念を精緻化すること，②仲間関係の量的側面の測定方法を見直し，より精度の高い測定方法とすること，③他の社会的情報処理段階における特徴にも研究を進めること，④状況と特性の相互作用を考慮した研究を計画すること，などが示唆された。

こうして，新たな視点から攻撃性研究に取り組み，基礎研究を緻密に積み上げ，丁寧な論で組み立てられた研究論文であり，基礎知見を学校教育に活用する方向も示唆され，この点において教育実践や社会に大きく貢献するものと判断された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 永井明子 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。